魔法の Wallet プロジェクト 活動報告書

報告者氏名:阿保孝志朗 所属:青森県立青森聾学校 記録日 2020年2月8日 キーワード:生活改善、コミュニケーション、移動支援、自己理解、自己決定、SNS、語彙力、進路指導

【対象生徒の情報】

- ○学年 高等部2年(16歳)
- ○障害と困難の内容 聴覚障がい

【活動目的】

- ○当初のねらい 「様々な状況を加味して進路を選択することができる」
 - ①物事を関連づけて考えることができる。
 - ②就労に向け相手や場面に応じた手立てを用いて、健聴者と互いに誤解のないコミュニケーションができる。
 - ③進路に向け学力を向上させることができる。
- ○実施期間 平成31年4月~令和2年2月
- ○実施者 阿保孝志朗
- ○実施者と対象生徒の関係 学級担任

【活動内容と対象児の変化】

○対象生徒の事前の状況

実態

<コミュニケーションの様子>

- ・補聴器、人工内耳を装用している。環境音の聞こえは良いが言葉ははっきりと聞こえているわけではない。
- ・口話の読み取りを行なっているが、わからないまま頷いていることがある。
- ・コミュニケーションモードは主に手話や指文字。発音が不明瞭で、あまり声を出したがらない。
- ·SNS 等の文字だけでのやり取りでは、誤解したり誤解されたりすることが少なくない。
- ・寄宿舎で生活しており、なかなか健聴者とコミュニケーションする機会が少ない。

<思考について>

- ・抽象的に考えることは苦手で、物事を関連づけて考えることが難しい。マインドマップを活用して思考を拡 散することには慣れてきた。
- ・話し合い活動では自分の意見を話すことが少ないが、話せるようになりたいと思っている。
- ・自分を客観的に考えたり、自分のパフォーマンスの質を考えたりすることが難しい。

<性格>

- ・恥ずかしがり屋で自分からよく話す方ではない。
- ・優柔不断でなかなか自己決定することができない。

<生活について>

・平日は寄宿舎で、週末は両親と一緒にいることが多いので、両親以外の健聴者とコミュニケーションする機会が少ない(両親は手話と口話で伝えてくれている)。

<学習について>

- ・準ずる教育課程で就労コースに在籍している。
- ・話せる語彙が少なく高校の教科書の語句はわからないものが多い。
- ・小学部低学年の頃に授業に参加できておらず、学習空白があると思われる。
- ・家庭学習は | 時間程度で宿題だけで終わることが多い。
- ・寄宿舎の就寝時間が決まっている。延灯することができるが、テスト前でも延灯することは少ない。課題 に対する意識の問題だと思われる。

<進路について>

- ・昨年度は工作が得意で地元の木製の家具工場で産業現場等における実習を行ったが、先輩の影響で自動車 メーカーなどの大規模な製造業で働きたいと話すようになった。
- ・将来一人暮らしをしたいと思っている。

【活動の具体的内容】

- ① 物事を関連づけ、よりよい行動を考え選択することができる。
 - ・活動の振り返りや因果関係の整理のために→「SimpleMind+」



- ・生活を振り返り時間を確保するために→手帳(バーティカルタイプ)の活用
- ② 場面に応じた手立てを用いて健聴者と互いに誤解のないコミュニケーションができるようになる。
 - ・健聴者とのやリとりに→「Smilingual(スマイリンガル)」の活用
 - ・個別面談でのデジタル筆談として→「フリック入力(本生徒)」と「Siri での音声入力(健聴者)」
- ③ 進路に向け学力を向上させることができる。
 - ・日本語の書く力の向上のために→「Word」「Pages」での文章添削
 - ・学習空白を補うために→「Palstep (パルステップ)」







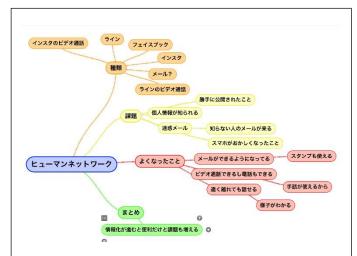
【対象生徒の事後の変化】

① 物事を関連づけ、よりよい行動を考え選択するこ とができる。

<マインドマップ編>

物事を関連づけて考えることに苦手さが感じられ ていたため、昨年度から「SimpleMind+」を活用 してノートテイクや学期の目標を立てたり反省を 行ったりした。

初めは教師の指示のもとに作成していたが手順 を覚え自分で活用することが増えた。生徒が自分 から活用するようになってからは、教師の話を理 解できるようになっていると感じることが増え た。



昨年度の情報科のノートテイクでの活用 関連について学ぶために板書をマインドマップで まとめたもの。この頃は教師主導だった。

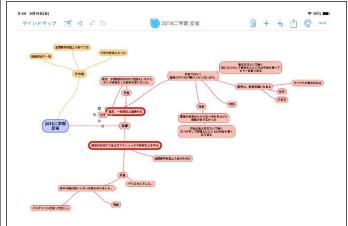


図2 昨年度の2学期の反省

反省をする際に担任の質問に答えながら結果から原因は何なのかをマインドマップにまとめることができた。本人の思考として「これまで I 回でも実施したこと」と「しっかりとやったこと」が同義であると考えていることを知ることができた。

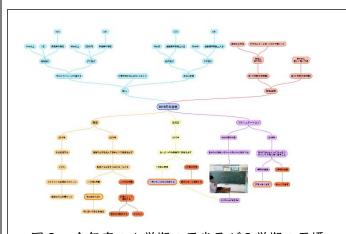


図3 今年度の I 学期の反省及び2学期の目標 思考を整理する手立てとして取り組みが定着して いるので、自分の置かれている状況をリストアッ プし作成することができた(4月)。

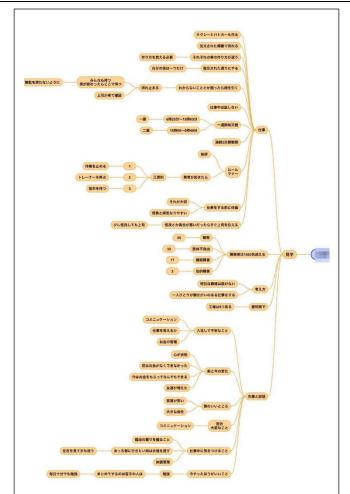


図5 || 月の企業見学についてまとめたもの || 月の企業見学では、説明の際にメモをとったものを自分でまとめるようになった。

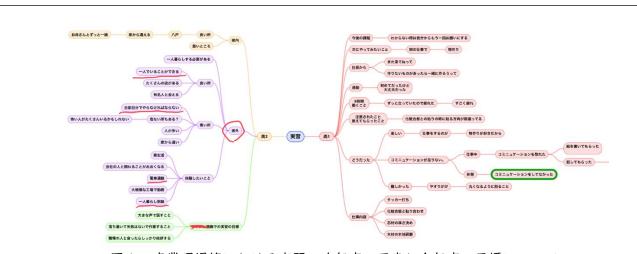


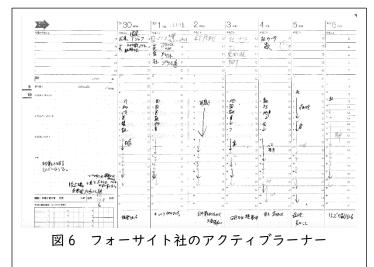
図4 産業現場等における実習 昨年度の反省と今年度の目標について 先輩の影響で、県外で生活したいという思いを抱くようになり、地元への就職、県外への就職につい て比較して整理し、考えを深めることができた(6月)。

<手帳編>

Ⅰ 日の過ごし方をⅠ週間で把握させたいので バーティカルタイプの手帳を活用した。色で分 けてその日の授業や宿題、放課後の時間を記入 するようにした。日々の記録を付けることは習 慣化できた。

昨年度の定期テストの反省(計画的に勉強できなかったということ)を受けて期末テストの 学習計画を立てた。

Ⅰ学期はテストの 2 週間前にテスト範囲に対して必要な勉強時間をリストアップし、テスト勉強を日課のどの部分で実施するか担任と一緒に考えた。Ⅰ日の自由になりそうな時間を手帳



にマークし、その時間に学習するように勧めたが、はじめからテスト日直前に勉強開始することにしていた ようでテスト期間の自由時間に学習することはほとんどなかった。

2学期後半は企業見学、部活動の全国大会、生徒会役員選挙などの行事が立て込んでおり、本生徒自身が計画的に準備を進める必要を感じたため、それぞれの提出の締め切り日を記入し、意識して準備する様子が見られた。

3学期の期末テストには、マインドマップで作ったこれまでのテストについて振り返ったことで、テスト期間の学習状況や教科ごとの学習時間を記述するようになり、これまでで一番テスト対策をして臨むことができた。その結果、5教科の合計点数はこれまでの最高得点となった。

② 場面に応じた手立てを用いて健聴者と互いに誤解のないコミュニケーションができるようになる。

先輩の影響もあるがマインドマップでの活動から、地元の企業への就労よりも関東や中部の大規模な製造業への就労することについて考えるようになった。

将来、県外で単身で生活することを想定した場合、今よりも健聴者の人とのコミュニケーション力が必須となる。本生徒は人工内耳や補聴器を装用することで環境音の聞こえは良いものの、音声を言葉として聞き取ることや、発音が不明瞭なため家族以外の人とは音声でのやり取りが難しい状況にある。

そこで日常的に携帯しているスマホを活用することで「聞くこと」の困難さや「話すこと」の困難さを補うことができるのではないかと考えた。

○デジタル筆談をしよう

<健聴者とのやりとり 窓口編>

いつでも携帯しているスマートフォンを活用し、手話が使えない健聴者と互いに負担なく通じ合える活動 (デジタル筆談) に取り組んだ。本生徒は寄宿舎で生活しており、手話を使わない人とは普段コミュニケーションする機会や必要性がほとんどないことに加え、健聴者とのコミュニケーションの機会が少ないため自分から機会を作ることには消極的であった。

そこで、進路決定のための関東や中部の大規模製造業へ企業見学・産業現場等における実習への参加を通 して、本生徒の持てる力で手話を使わない人との円滑なコミュニケーションカの向上に取り組んだ。

5/7 (青森の駅)

本生徒が音声でコミュニケーションしたいとのことだったので、どうしても読話ができない場合は「Smilingual」を使うこととした。単語で伝えられる目的地などは音声で伝えることができた。しかし一般的に聞き間違えが多い数字の発音が難しく、乗りたい新幹線の時間をうまく伝えることができなかった。また、相手に伝わらなかった動揺から時間の確認場面で、手話で数字を示したため、さらに相手に伝わらなかった。JR職員の質問に対しても読話ができなかったときにスマホを提示して音声入力を依頼したが、初めの一言目の単語の認識がうまくいかなかったために、言い直してはもらえず筆談をすることになった。その結果、窓口の職員の筆談に対して質問に答える形になり相手ペースの会話になってしまい、結果的に欲しかった切符を手にすることはできなかったことや、窓口にかなりの行列ができてしまったためこの日は担任の協力を得て購入した。

5/16 (愛知の駅)

切符の変更の仕方を学習するために愛知のみどりの窓口で実施した。この時は変更してほしい時間等をあらかじめ「Smilingual」で入力して提示した。また、その際に質問は入力してくださいと明記したことにより職員の方が質問の時に音声入力してもらうことができた。標準語での入力のため、ミスもなく表示されコミュニケーションができた。座席図などの指さしでのやりとりもあり問題なく時間変更することができた。

6/13 (青森の駅)

5/7 の反省、5/16 の成果から、「Smilingual」にあらかじめ伝えたい事を入力して実施した。目的地、日時など概ね伝えることはできたが、想定外の事態(満席で切符がない)が起こり、音声入力で説明を求めたが方言がうまく認識されず、筆談になってしまった。筆談(健聴者である担任が聞いている説明を要約した説明)で状況を生徒が理解することができずに担任が支援した。

8/23 (青森の駅)

これまでの反省を受けて自分が伝達する時は、あらかじめ「Smilingual」で準備したものを示した。今まで質問された事を想定してこちらの伝えたい事を伝えることができた。相手の質問は理解できていると感じていたため確認の場面ではスマホを使わなかった。曖昧な理解のまま頷いてしまい、違う切符が購入されそうになり、切符の発券の前に担任が職員に確認した。

8/29 (東京の駅)

JR 以外の路線を活用することや交通費の請求のために「Suica」を「Apple Pay」で使用した。一切のコミュニケーション(生徒からの発信)なしで障害者割引を使うことができた(首都圏では当たり前かもしれないが青森では利用できない、また、ほとんど知られていないと思われる。)。

9/17(青森の駅)

全国聾学校陸上競技大会の切符を購入。事前に入 力したものを提示したが日付を忘れて質問される。 スマホを出したが、相手が50代男性であることや 忙しいこともあり、こちらの申し出は受け入れても らえず筆談になる。単語が中心の筆談であることや 本生徒がわからない旨を伝えることができなかった ため手こずったが何とか購入した。



図7 | 人で飛行機に搭乗

9/29 (遠征先のホテル)

ホテルのチェックインに挑戦した。こちらからの内容は「Smilingual」に入力して提示した。音声入力も 依頼したが、生徒のスマホでは受付の人がイニシアチブを取れないために筆談になった。

9/29~30 (全国聾学校陸上競技大会)

大会の進行状況もあり実際に計画していた時間以外でも、本生徒が臨機応変に交通手段を選び移動することができた。

10/8(企業見学の際の飛行機のチケット)

II 月の企業見学に必要な飛行機のチケットをインターネットで注文し、コンビニで決済することができた。窓口でのやり取りがないのでスムーズに注文することができた。

11/5 (青森の空港)

家族旅行で飛行機に乗った経験があるということで「Smilingual」を活用しなかった。その結果、チェックインした際にあいまいな返事をして荷物検査の場所と時間がわからず、空港に見送りに来た担任に注意を受けた(図7)。

11/7 (愛知県の駅)

空港行きのバス停の場所が分からず、

「Smilingual」で質問し「Smilingual」で教えてもらい無事にバスに乗り空港に行くことができた(単独での会社見学のため本人談)。 見学先の企業から青森まで | 人で飛行機に乗り帰ってくることができた。

| | | | (青森の駅)

産業現場等における実習の移動で使う新幹線の

図8 | 人で購入しているところ

切符購入では、完全に一人(担任はみどりの窓口の外)で購入できた。「Smilingual」を準備するが特に問題がなく使用せずに切符を購入できた(図8)。

|||/||8~|||/25(愛知で産業現場等における実習)

新幹線で愛知まで産業現場等における実習のために向かう。 休日に先輩と待ち合わせて外出した際に遠隔監視駅で行きたい方向が分からなくなるが、インターホンを押し入力した文章を「Smilingual」の読み上げ機能を活用して要件を伝え、スピーカーから聞こえてくる案内を「Smilingual」で文字に変換させ、<u>自分で解決することができた</u>。あまりの嬉しさに担任に連絡した。

<交流及び共同学習編>

近隣の普通高校との交流及び共同学習では「UD トーク」を活用した。主に普通高校の生徒の話す内容を変換する目的で活用したが、どうしても伝わらない時には「UD トーク」にテキストを入力してコミュニケーションする様子が見られた。「UD トーク」を共通のツールとする一方で自分から何を話して良いか分からずに沈黙してしまうこともあった。

大学のよさこいサークルとの交流では同様に「UD トーク」を活用し、サークル活動や振り付けについて質問することができた。

<個別面談編>

デジタルでの筆談をすることで担任の手話表現の未熟さからくる理解のしにくさを補うことができた。意

味が通じにくい表現やその場で別の言い回し、担任の手話では表現できないような言い回しに触れることができた。音声入力やフリック入力することで筆談よりも多くの情報をスムーズにやりとりしたりすることができた。また、「Microsoft Teams」を使用し「|対|」のチームを作成しスレッドごとに会話をまとめ後から参照しやすくした。



③進路に向け学力を向上させることができる。

<Palstep編>

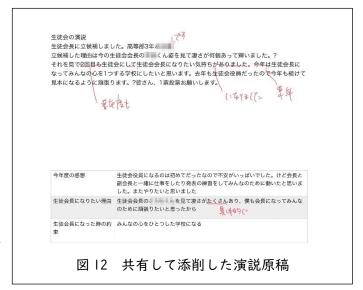
小学部時代に学習空白があったと思われる箇所を「Palstep」で取り組むことができるようにした。 小学校の国語の問題はタブレットだけでできる問題が多く、毎日ではないが取り組む様子が見られ、 小学校の範囲は終えることができた。算数に関しては別紙で計算する等の手間を嫌がりほとんど実施していない。問題が間違った際にも動画を見て学習することがほとんどないということだった。 寄宿舎での決められた学習時間が「時間であり、 ほとんどを日々の宿題の実施で終わってしまうこ



とや学ぶ必然性について意識できていないなどの理由もあり、継続した実施ができなかった。

<文章の添削編>

助詞の使い方や文法力の向上のため、毎朝ニュース発表を行った。「Word」でニュースの要約を作成したものを「Microsoft Teams」で共有した。誤字や訂正がある場合にはその都度担任が訂正した。生徒のスマートフォンに入っている「Pages」を担任と共有し、産業現場等における実習の期間に上司に提出する実習日誌の確認や実習後に行われる生徒会選挙立会演説会の原稿を作成した。文書を共有することで添削の手間はかなり省くことができたが、生徒がそのまま直すために文章力が向上しているとはいえなかった。



【報告者の気づきとエビデンス】

<主観的気づき>

- 動事のつながりを視覚的に認知することで視野が広がったのではないか。
- ② 安心できる手立てを持つことで自信を持てるようになったのではないか。

<エビデンス(エピソード)>

①について

マインドマップを日常的に活用することで物事の関連性を理解できるようになり、それによって自分でするべることを考えられるようになっている。 苦手で将来自分に必要だと実感できない活動には積極的に取り組むことができなかったが、自信がついたことやが立ったこと、次年度たったの見通しが立ったこと、次年度たったの人の最高学年であることなどが重なり3学期の期末テストはこれまでにないくらいテスト勉強に励むようにな

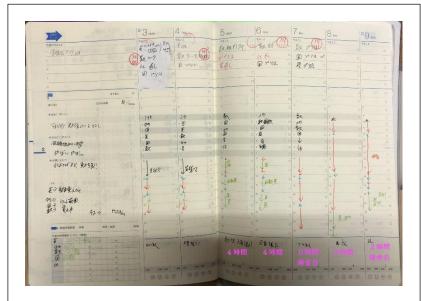


図 13 3 学期の期末テスト期間の学習の様子

り、高等部に入学してからで一番よい点数をとることができた。(図 13)。

②について

困った際に解決する方法を複数持ち、実際に解決する経験を通して自信をつけ I 人で他県で過ごすことができるようになった。上述のようにスマートフォンを自分の耳や声として活用しトラブルを解決することができた。担任に送ってきたメッセージの内容からも自信を持っていることがわかる。



図 14、15、16 トラブルを解決した後に送ってきたメッセージ

【今後の見通し】

- ① 物事を関連づけ、よりよい行動を考え選択することができる。
 - ・リストアップしたものを整理したり、関連づけたりできるようにする。
 - ・家族との同居生活と一人暮らしについてのメリットデメリット、収入や支出についての実際のコストなどを考えさせ、3年生に向け進路希望先の選択にいかす。
 - ・手帳の活用については、 I 週間の学習時間の累計、運動時間の累計、スマホの活用時間などを視覚化し、 時間の有効利用ができるようにする。
- ② 場面に応じた手立てを用いて健聴者と互いに誤解のないコミュニケーションができるようになる。
 - ・場面に応じたコミュニケーションについて整理し、適切に活用できるようにしていく。
 - ・字幕付き動画や漫画など興味関心のあるコンテンツを活用し、口語表現や語彙を増やし文字でのコミュニケーションカの向上を図る。
- ③ 進路に向け学力を向上させることができる。
 - ・学習については寄宿舎で決められた学習時間だけの実施にとどまっているので、就労を見据え自由時間を 活用し学習していくことについても再確認させる。
 - ・現在希望している製造業で求められる学力に特化した家庭学習を行なうことができるように支援していく。

活動を支える必然性について今一度理解させ、目標に向け「できる方法で努力する」ことを自己決定できるように促していく。